思いやりの心

藤沢小学校４年
向井未織（むかいみおり）

学校が終わって、わたしが校門を出たら、おとしよりのおばあちゃんが、横だん歩道の前で立っていました。「しん号が青なのに、立ったままでふしぎだな。」と思いながらわたしは先にわたりました。わたしは、とてもいそいでいたので、そのまま通りすぎてしまいました。でも、なぜか心のおくがもやもやしました。わたしは、とっさにおばあちゃんの立っていたしん号の方をむきました。おばあちゃんは、まだ立っていました。わたしには、おばあちゃんがこまっているように見えて、心がぐっといたくなりました。「どうしよう、わたしはいそいでいるのに、また、しん号をわたるなんてできない。」と思い、こまってしまいました。でも、「もしかすると、おばあちゃんもわたしとおなじ気持ちなのかもしれない。」と思い、すぐにしん号をわたりかえしました。

わたしは、今まで知らない人に話しかけたことはめったにありません。心ぞうがドキドキして今にもにげ出したいぐらいでした。わたしは、おそるおそるおばあちゃんに、「おばあちゃん、むこうに行くんでしょ。わたしも行くところだから、いっしょに行きましょう。」と声をかけて見ました。すると、おばあちゃんは、にこにこしながら、「ありがとう。」と言ってくれました。わたしは、ゆう気を出して声をかけてよかったなと思いました。それから、おばあちゃんは、「ほんとうにありがとう。わたしは、むこうのゆうびんきょくへ行くところだったの。あなたは、思いやりのある子だわ。ありがとう。」と、ていねいにおれいを言って、頭を下げて歩いて行ってしまいました。

おばあちゃんのこのひと言で、わたしの心がピカッと明るくなった気がしました。そして、知らない人にも声をかけても大じょうぶなんだというゆう気をもらいました。

わたしは、おばあちゃんの言っていた「思いやりの心」の意味は、相手の人の気持ちや心を考えて行動することなんだと思います。わたしは、いつも、言われていやなことは言わないように気をつけています。自分が言われると心がもやもやするからです。これからも、だれにでもやさしくせっして、人がいやだと思うことはやらないようにど力しようと思います。相手の人も自分も心が温かくなるような思いやりの心をもってがんばっていきたいです。

武者と生まれて描く虹
～畠山重忠伝説～

③宇治川の先陣

関東随一の名族秩父氏の直系畠山重忠が頼朝軍に加わったことにより、武蔵、相模の武士たちは相次いで頼朝のもとに集まった。こうして関東から平氏の勢力は一掃された。

頼朝が挙兵して間もなく、木曽義仲（きそよしなか）も以仁王（もちひとおう）から平家追討の令旨（りょうじ）を得て、挙兵した。義仲は大蔵館（現嵐山町）で生まれたといわれ、二歳の時に父が殺され、義仲も殺されそうなところを、重忠の父重能（しげよし）らに助け出され一命を取り留めた人物である。義仲の祖父は源為義（ためよし）で、頼朝とは従兄弟にあたる。挙兵した義仲は各地で平氏の大軍に連勝し、京に上ると後白河（ごしらかわ）法皇から旭（あさひ）（朝日）将軍の称号を得た。しかし、義仲の京での行状をみた法皇は次第に義仲と対立し、ついに元暦元年（１１８４）に鎌倉の頼朝に向けて義仲追討の命を出した。

頼朝は弟の範頼（のりより）と義経（よしつね）に六万騎を与えて近江（おうみ）国へ進出させた。重忠は源義経軍の先陣に属して義仲と宇治川に戦った。『平家物語』『源平盛衰記』には、重忠が丹党五百騎を率い、真先に宇治川を押し渡った逸話が載っている。重忠は愛馬を射られ担いで渡河している時、馬を流された烏帽子（えぼし）子（こ）の大串重親（おおくしげちか）が助けを求めたため、大力（たいりき）の重忠は重親をつかまえて対岸に放り投げ、重親は徒歩（かち）立ちの一番乗りの名乗りを上げたという伝説が残されている。

『源平盛衰記』では重忠は三条河原で義仲軍の女武者巴御前（ともえごぜん）と一騎討ちを演じ、怪力で巴の鎧の袖を引きちぎり、巴は逃げ出したと記録されている。

この宇治川の戦いで範頼、義経軍は勝利し、源氏の一方の旗頭である義仲は、三一歳で短くも激しい生涯を閉じた。

夢なかるべからず

水彩に想いを込めて

山崎（やまざき）　智絵（ちえ）さん

心の投影

白い紙を前に細密な鉛筆で線を描く。線は人それぞれの個性が強く、一本一本が連携して作品となる。線は人の個性であり、作品は心の中の投影である。作品が出来上がる度に、人に見せることを少しためらう。それは自分の心の中を書いた日記帳を人に見せるようなものだから。イラストレーター山崎智絵。山崎の描く作品はどこまでも、彼女自身である。

環境工学科

物心ついた頃から、絵を描いていた。何か目的があるわけではなく、描くことが日常だった。けれど、それを職業にとは考えなかった。少しずつ医療問題や地球環境に興味のベクトルが向いていったからだ。大学は環境工学科を選んだ。地球の環境保全を真剣に考え、学問に没頭した。

しかし、その生活の中で、自分が見つからなくなっていった。心の表層の思いと、奥底は別のものがあるのではないか。この時はじめて、心から絵を描きたいと思った。それこそ描かずにはいられない状態になった。心の底からマグマが噴き出た。

白い空白の部分にも山崎の想いが込められている

題名をつけない

深谷市内の自宅は深夜まで明かりが消えない。寝る時も鉛筆を離さない。それほどまでして描く目的は何か。大きく占めるものは心のほとばしりだが、描く以上は誰かのためになりたいと考えている。そのために作品には敢（あ）えて題名をつけないものが多い。見る人の心に委ねるためだ。

今はまだイラストレーターとしては駆け出しだ。しかし、昨年コンテストにも入選し、評価は高まりつつある。山崎は評価という名の心の共感が嬉（うれ）しい。

夢七訓（ゆめしちくん）
夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに　幸福を求める者は
夢なかるべからず※

（本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています）

※渋澤栄一が残したとされる「夢七訓（ゆめしちくん）」より。「夢なかるべからず」は「夢を持たないといけません」という意味。